クリスマス講筵

十字架を負って生まれ給いし主キリスト
――シメオン老人の預言とその成就――

２０２４年12月22日（京都キリスト召団集会所）
奥田 昌道

ルカ伝第2章　シメオン老人の預言　十字架を負って生まれ給いし主キリスト　ご恩返し　我らの生涯は報恩の生涯　自己保存本能のエゴ　京都キリスト召団の使命と各人の課題　祈り

●ルカ伝第2章

今日のタイトルとして、次の3項目をあげました。

Ⅰ．十字架を負って生まれ給いし主キリスト――シメオン老人の預言とその成就

Ⅱ．我らの生涯は報恩の生涯

Ⅲ．以上の視点から京都キリスト召団の使命、存在理由と各人の課題を考えてみたい。

一番目の「十字架を負って生まれ給いし主キリスト――シメオン老人の預言とその成就」から始めたいと思います。

まず聖書朗読をいたします。文語訳ですが、ルカ伝の第2章。

「1その頃、天下の人を戸籍に著かすべき詔令、カイザル・アウグストより出づ。2この戸籍登録は、クレニオ、シリヤの総督たりし時に行われし初のものなり。3さて人みな戸籍に著かんとて、各自その故郷に帰る。4ヨセフもダビデの家系また血統なれば、5既に孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著かんとて、ガリラヤの町ナザレを出 でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘムという処に到りぬ。6此処に居るほどに、マリヤ月満ちて、7初子をうみ、之を布に包みて馬槽に臥させたり。旅舎におる処なかりし故なり。

8この地に野宿して、夜群を守りおる牧者ありしが、9主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。10御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民一般に及ぶべき、大なる歓喜の音信を我なんじらに告ぐ。11今日ダビデの町にて汝らの為に救主うまれ給えり、これ主キリストなり。12なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒を見ん、是その徴なり』

13忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讃美して言う、

14『いと高き処には栄光、神にあれ。
地には平和、主の悦び給う人にあれ』

15御使等さりて天に往きしとき、牧者たがいに語る『いざ、ベツレヘムにい

たり、主の示し給いし起れる事を見ん』16乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、
馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあう。17既に見て、この子につき御使の語りし
ことを告げたれば、18聞く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。19而して
マリヤは凡て此等のことを心に留めて思い回せり。20牧者は御使の語りしご
とく凡ての事を見聞せしによりて、神を崇めかつ讃美しつつ帰れり。
21八日みちて幼兒に割礼を施すべき日となりたれば、未だ胎内に宿らぬ先
に御使の名づけし如く、その名をイエスと名づけたり。
22モーセの律法に定めたる潔の日満ちたれば、彼ら幼兒を携えてエルサレ
ムに上る。23これは主の律法に『すべて初子に生るる男子は、主につける聖
なる者と称えらるべし』と録されたる如く、幼兒を主に献げ、24また主の律
法に『山鳩一つがい或は家鴿の雛二羽』と云いたるに遵いて、犠牲を供えん
為なり。25視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔
にして、イスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在す。26ま
た聖霊に、主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、27此とき
御霊に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法の
慣例に遵いて行わんとて来りたれば、28シメオン、イエスを取りいだき、神
を讃めて言う、
29『主よ、今こそ御言に循いて、僕を安らかに逝かしめ給うなれ。
30わが目は、はや主の救を見たり。
31是もろもろの民の前に備え給いし者、
32異邦人をてらす光、御民イスラエルの栄光なり』
33かく幼兒に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、34シメオン彼ら
を祝して母マリヤに言う『視よ、この幼兒は、イスラエルの多くの人の或は
倒れ、或は起たん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。35――剣
なんじの心をも刺し貫くべし――これは多くの人の心の念の顕れん為なり』
36ここにアセルの族パヌエルの娘に、アンナという預言者あり、年いたく
老ゆ。処女のとき、夫に適きて七年ともに居り、37八十四年寡婦たり。宮を
離れず、夜も昼も断食と祈祷とを為して神に事う。38この時すすみ寄りて神
に感謝し、また凡てエルサレムの拯贖を待ちのぞむ人に、幼兒のことを語れり。
39さて主の律法に遵いて、凡ての事を果したれば、ガリラヤに帰り、己が
町ナザレに到れり。
40幼兒は漸に成長して健かになり、智慧みち、かつ神の恵その上にありき。」

●シメオン老人の預言

さきほど申したかと思いますが、大きなタイトルの一番目は、「十字架を負って生まれ給いし主キリスト」、副題として「シメオン老人の預言とその成就」と、そのように申しました。この「シメオン老人の預言」が、今朗読いたしましたこのルカ伝の箇所です。第２章28節からです。

「28**シメオン、イエスを取りいだき、神を讃めて言う、**
29**『主よ、今こそ御言に循いて、僕を安らかに逝かしめ給うなれ。**30**わが目は、はや主の救を見たり。**31**是もろもろの民の前に備え給いし者、**32**異邦人をてらす光、御民イスラエルの栄光なり』**33**かく幼兒に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、**34**シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼兒は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。**35**――剣なんじの心をも刺し貫くべし――これは多くの人の心の念の顕れん為なり』**」

この箇所ですね、このシメオン老人の預言の言葉、そしてこの通りになるわけですけれども。世間では、このクリスマスのことを

「ああ、クリスマスは楽しい、楽しい。クリスマスおめでとう」

とか、そう言って、非常にクリスマスを楽しい、嬉しいことというふうに受けとっています。これは御使が、さっき読みましたように、

「13**忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讃美して言う、**14**『いと高き処には栄光、神にあれ。地には平和、主の悦び給う人にあれ』**」

と、こういう祝福の喜びの言葉があったから、それを受けて人々はクリスマスを――いや、これはもうクリスチャンでない人でも――みんな「クリスマスおめでとう！」とか、クリスマスにはプレゼントを交換したりとか、何かクリスマスを非常に楽しいこと、嬉しいことのように受けとって、そのように振る舞っていますが、このシメオン老人の言葉を本当に受けとったら、そんな気楽なことを言ってられないというのが私の正直な気持ちです。

即ち、キリストはもう生まれる前からこうやって十字架を負わされていらっしゃったというこの事実がある。シメオンは一方では、イエス・キリストのことを非常に感謝して、

「待ちに待ったそのお方が本当にここにおいでになった。このお方に出会うまでは、お前は天界に迎えられることはないぞ」

と、そう言われていた。そのお方に今会うことができた。

「25**……この人は義かつ敬虔にして、イスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在す。**26**また聖霊に、主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、**27**此とき御霊に感じて宮に入る。**

ちょうど両親がこのイエスを抱いて、宮参りにやって来た。この瞬間にこのシメオンはつ

かつかと近づいてきて、その幼児イエスを抱いて、

28**シメオン、イエスを取りいだき、神を讃めて言う、**29**『主よ、今こそ御言に循いて、僕を安らかに逝かしめ給うなれ。**30**わが目は、はや主の救を見たり。**31**是もろもろの民の前に備え給いし者、**32**異邦人をてらす光、御民イスラエルの栄光なり』**

ここまでは非常に祝福に満ちた宣言です。ところが、お母様のマリヤに言った言葉が私の胸を刺し貫くんです。

33**かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、**

と言ってます。

「ああ、このご老人はなんと不思議なことを仰るんだろう。はや主の救を見たり」

とか。しかも、

「是もろもろの民の前に備え給いし者、異邦人をてらす光」

と。異邦人のことまでちゃんと言ってくれているというのは、私は非常にありがたいんですよ。単にイスラエルの民の救い主でとどまらない。「異邦人を照らす光」、そして「（レジメ）御民イスラエルの栄光なり」と、そう言ってくれている。このことはまず私は非常に感動する箇所です。更に次の言葉です。お母さんのマリヤさんに対して、

34**……この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。**

その次ですね、

35**――剣なんじの心をも刺し貫くべし」**

と。祝福どころか、

「あなた、大変なことになるんですよ。剣があなたの心を刺し貫く」

と、こんな不吉な預言をしている。そのことを非常に私は何か心うたれる思いがいたします。マリヤさんにしたら、本当にどんなに辛い宣言を受けたかと。

●十字架を負って生まれ給いし主キリスト

即ちこれは別な角度から言いますと、マリヤさんの胸が刺し貫かれるということは、イエス・キリストのご受難を告知しているわけです。ですから、イエス・キリストはもう十字架を負って生まれてこられたという、そういう宿命を担って地の人となられたという、そのことですね。

マリヤさんにしても、いそいそとして喜んで宮参りに来たんでしょ。本来大きな祝福を受けてお祝いしてもらいたいところなんです。ところが、シメオン老人が言うには、

「この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、

救いあり、審判ありというわけです。

また言い逆いを受くる徴のために」

と。「言い逆いを受くる」ということは、キリストは単に祝福されて歓迎されるのではなくて、

「大変な十字架を負って生まれ給うたんだよ」

と、そういうことを宣言しているんです。だから、「剣（つるぎ）なんじの心をも刺し貫くべし」と、そういう不吉な預言をしている。そのことを本気で受けとったら、「クリスマスおめでとう」とか、「クリスマスは嬉しいよ」とか――確かに天使は

「今日、あなた方の町に救い主がお生まれになった」

と言って、天使の喜びの歌声があったという非常に明るい場面が描かれていた――けれども、本当のところは、このシメオン老人の預言のように

「お母さん、マリヤさん、あなたの胸は剣で刺し貫かれるんですよ」

と。つまり、

「キリストは生まれながらに十字架を負って生まれてこられた」

という、その厳粛なる事実なんです。そのことを本気で受けとったら、やれ

「クリスマスだ、うれしいね、おめでとう」

なんて言って、世間でクリスマス・プレゼントだ何だといって、ワイワイガヤガヤやっているのは実に怪しからんことだと、私はそう思うんですよ、本当のところ。十字架を負って生まれてこられたキリストのご誕生を単に

「うれしい、うれしい。プレゼントだ、クリスマスだ」

なんて、そんな騒いでいることがあっていいのか！という、そういう私は義憤というか、憤慨、憤激を覚えるんです。おまけにクリスマス商戦という、儲けようとして利用しているでしょ。またそれに乗っかったりしているでしょ。また、世間の人もね――まぁそれは世間の人はキリストのことを知らんからしょうがないけれども――「クリスマスだ」と言ってワイワイワイワイ喜んでいる。そういう世の中の風潮に対して、クリスチャンはやはりプロテストしないといかんと思う。

「そんなもんじゃないんだよ！」

と――私なんかガラがわるいから――「なめてんか！」と、こう言いたいところなんです。「十字架を負って生まれ給うた」というこの事実を真剣に受けとったら、そんなやれ「うれしい」なんてことを言ってられないというのが私の気持ちなんです。だから、せめてクリスチャンはプロテストしてほしい。

「クリスマスなんてそんな呑気な気楽なものではないんだよ。十字架を負って生まれてくださった、そのことがお前はわかるのか。それは誰のせいかと言ったら、我々みんなの神さまに対する反逆、言い逆らいの徴なんだ」

ということを、せめてクリスチャンは一言プロテストしていただかないと、私は気が済まないんですよ。ええ。皆さんもそんなふうに思ってくださいましたですか、これまで。今

までそういうことがなかったら、これから思ってください。そして、

「クリスマスにはそんな気楽な、プレゼントを交換して、やれサンタクロースだ、やれ何だと言っているような、そんなものではないんだよ、本当は。十字架を負って生まれてくださった。誰のせいなんだ。我々の人間の反逆なんだよ」

と。そういうことをやはり、クリスチャンはしっかりと言っていただかないといけないと思っております。嫌われるかも知れませんよ。けれども、それが本当のことなんです。

イエス・キリストはヨハネから水の洗礼をお受けになる。これは悔い改めの洗礼です。洗礼のヨハネに促されて、みんな続々とそういう悔い改めの洗礼を受けにやって来た。その時に、イエス・キリストもやはりやって来られて、

「いいえ、とんでもない。あなたはそんな洗礼をお受けになるお方ではない」

と、ヨハネは止めようとしたけれども、イエスは

「いや、私だって何も例外ではないんだ」

と言って、水の洗礼をお受けになった。ヨルダン川というのは、地球上で一番低い所を流れていると言われている川なんです。悔い改めを全く必要としないお方が、

「いや、私だって特別ではない」

と言って、ヨルダン川に身を沈められた。これは小池先生が仰ったけれども、

「これは、どういうことなのか。まともな悔い改めさえできない我々に代わって、キリストが悔い改めをやってくださったんだ」

ということを仰った。だから、イエスというお方の在り方というのは、「自分だけは特別だ」なんて思っておられない。つまり、我々と同じようにイエスは振る舞っていてくださっている。つまり、我々の反逆といったものを全部、あの時からもう背負い込んでくださっているということなんです。だから、そういうこと一つをとってみても、私はもうキリストの前には本当に

「ありがとうございます」

としか言葉がないんですよ。

●ご恩返し

私は今日のタイトルの一番目に、

「十字架を負って生まれ給いし主キリスト――シメオン老人の預言とその成就」

と書きました。正にキリストのご生涯を見てますと、その通りですよね。しかも、それも生まれながらにしてそういう十字架を負ってこの世に送られて来られたと、そういう事態です。それを本当に受けとりますと、

「我々の生き方はどうなんだ、どうなっていくのが我々らしい在り方なのか」

ということを考えますと、私はご恩返ししかないと思います。

世間の人はいろいろ自分が不幸な目だとか、いろんな事に遭いますと、

「神も仏もあるもんか！」

とか、なんだかんだと文句を言いますよ。私はそれに対して、

「あなたは神さまや仏さんを本当に大事にしてきたの？」

と。何か自分が変な目にあったら、「神も仏もあるものか！」なんて偉そうなことを言っているけれど、「あなたの日頃はどうだったのか？」と私は聞きたいような気持ちになります。

そんな気持ちになるというのも、そもそもイエス・キリストご自身がもう十字架を背負って生まれてくださったという、そしてそれを黙ってお受けくださったという、そういうイエス・キリストのご生涯ということを思います。そして、イエス・キリストの十字架は誰のためだったのか、ご自身のためではありませんでした。ご自身は祈っていれば直ちに眩い姿になって、そのまま天界に昇っていくお方ですよね。ところが、そのお方が十字架にかけられた。しかも神さまに棄てられたんですね。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と叫ばれた。こういう事態を、私は「クリスマスだから」といって、それを避けておくのでなくて、あのように神一筋、御意一筋に自分を委ねきって、それに忠実に生きられた。

「わが思いではなく、主よ、あなたの御意を成してください」

というキリストの生き方は、あの「主の祈り」にうたわれていますように、まず

「聖名を崇めさせてください。御意が天において成っているように、この地にも成らしめてください、この身を通して」

と、そういうふうに自分を献げきった祈りを貫いてくださったお方でしょ。そのお方が実は生まれながらにして十字架を負っておられるということをこのシメオン老人はお母さんに対して言っている。お母さんたちは宮参りに、いわば感謝の献物をしようとしてやって来たわけです。だから、お母さんは、両親は喜んでいるんですよ。そういった喜んでいるご両親を前にして、特に母親であるマリヤさんをつかまえて、シメオン老人はこんな不吉な預言をしたわけでしょ。

「視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。

反逆をされますよと。救い主ともあろうお方が言い逆らいを受ける。そして、

剣なんじの心をも刺し貫くべし」

「お母さん、あなたの胸は剣で刺し貫かれるんですよ」

と。つまり、生まれながらにして十字架を負わされてお生まれになった。そしてそのことをシメオン老人は正直に告白している。そして、マリヤさんを祝福するどころか、

「あなたはこれから大変な定めを背負って生きなければならないんですよ」

と。そういうことを言われて、本当にマリヤさんは辛かっただろうと思うんです。そうい

うことをやはり、クリスチャンである方々はしっかりと受けとめていただきたいと思います。

●我らの生涯は報恩の生涯

そうしますと、次に二番目のお話に移るんですけれども、

「私たちはどのような生き方をするのがよいのか」

という話です。世間では、大変お世話になったら、何とかご恩返しをしたいと思いますよね。ご恩返しというのはやはり、お世話になったという現実があるから、それに対して何とかお礼をしたい、感謝の気持ちを表したい、それを形にしたいという、そういう人間として自然な思いが出てくるわけです。それが報恩ということです。

そうしますと、それでクリスチャンの方は、

「いったい自分はどういうご恩を受けてきたのか、自分はどういうご恩返しをすべきなのか」

と、そのことの思いをいたしていただきたいと思うんです。世間みたいに、「やぁクリスマスだ、うれしい、うれしい」なんて言っている場合かと。さっきのシメオン老人の預言を取り上げても、

「お母さん、あなたの胸は剣で刺し貫かれるんですよ」

と、そういう不吉な預言をもらって、しかもそれが現実になったわけです。そうすると今度は、私たち一人ひとりはイエスさまから何をしていただいたのか、どういうご恩返しが我々には必要なのかと。そっちの話になるんです。

これが非常に大事なことなんですよ。我々人間はやはり、

「お世話になったら何かお礼をしたい、お世話になったらお返ししたい、何かご恩返しをしたい」

と思いますよね。そうすると、どれだけご恩を受けたかという、その受けとり方によってご恩返しの内容も程度も変わってくるんです。そうですね。

「命懸けでご恩返しをしたい」

と、そこまで思わせていただいたかということですよ。

ネロの迫害とかいろいろありました。あの時代のクリスチャンたちは本当に命懸けでした。その後も、クリスチャンはいろんな迫害にも曝されてきました。日本でも「二十六聖人」とかいうカトリックの聖徒のお話もありますし、大変な運命を背負わされて、まぁ言うならば「地上では何もいいことはなかった」というような生涯を送られる方もありますよね。けれども、どんなことも、私から言えば、我々はいったい、各人、クリスチャンお一人お一人はどれだけキリストから受けてこられたか、その受けとり方、その深さ如何によってその人のご恩返しの内容も変わってくると思うんですね。

「イエス・キリストを信じたって、何もよいことはないわ。イエス・キリストを信じたって、しんどいばっかりやわ」

なんて文句を言っている人は、どれだけのご恩を受けているかということがわかってないんですよ。本当にどでかいご恩を受けてしまったら、

「このご恩は一生かかってもお返しできません」

という、まぁよく世間ではありますね、本当に助けてもらった時には、

「このご恩はもう生涯忘れません。一生かかってもお返しできないくらいたくさんのご恩を受けました」

という方もいらっしゃるでしょう。

つまり、我々のご恩返し、報恩は我々が神・キリストからどれだけのものをいただいたか、それによって、その受けとり方によって我々のご恩返しも変わってくる。こう思うんです。何もクリスチャンは特別に出来がいいから、ご恩返しをたくさんする。そんなのではないと思う。人間はみんな同じですよ。みんなエゴイストなんです。みんな自分のことしか思ってないんですよね、神さまのことなんかより。

だいたい、「日本人は」なんて言ったら失礼ですけれども、神信心は自分の幸せのためです。

「神さまの聖旨（みむね）のために、御意（みこころ）が成るように」

という、神中心で信仰するのではなくて、「信仰」といえば、自分が幸せになりたいために信仰する。

「自分を幸せにしてくれないような神さまなんて蹴飛ばすよ」

と。そうでしょ。普通はそうなんですね。

「なぜわるいか。神・仏は人間を幸せにするために存在しているんだ」

と、こうくるわけです。自分が主であって、神さま・仏さまは自分の子分みたいなもの。そう考えているのがほとんどですよ。だから、

「あそこに行ったら御利益（ごりやく）がある。ここは霊験あらたかだ」

という全部、人間に仕えるのが神の役割であって、人間に仕えて人間を幸せにしないような神さまは蹴飛ばすよと。これが「日本人の」と言ったらわるいかも知らんけれども――まぁどこの国も一緒かも知れませんが――人間は自分が主なんです。神とか仏とか何とかは全部、自分の子分なんです。自分に仕えるなら、自分を幸せにするなら、拝んでやってもいいという。だいたいそれが一般ではないですか。

それに対して我々が導かれているキリスト道というのは全くそうじゃないでしょ。そんなことはもう言う必要もない。でも、そのくらいに、私が今日申し上げたいのは、自分がどれだけ神・キリストからご恩をいただいているか。その深さ高さ偉大さ、それによって自分がキリストのために、神の国のために、自分を献げていこうというそのご恩返しも違ってくるというのが、私の正直な気持ちなんです。

人間が立派だからとか、どうとかこうとかという、そういうのではなくて、私から言えば、どれだけご恩を受けたか、それによってご恩を受けた人のご恩返しも変わってくる。人間というのはそういうもんだという、これが90歳を越えた私の考えなんですよ。人間とはそんなに大きく変わるものではない。

本当にご恩を受けたら、誰だって本当にご恩返しをしたい、そうではないのだろうか、というのが私の気持ちなんですね。特にクリスチャンの方は、クリスチャンと称している方々がどれだけ神・キリストからご恩を受けとったか、受けとっているか。それの受けとり方の深さ高さ大きさによって、我々の神・キリストへのご恩返しも変わってくるのではないだろうか。その人が立派だとか、出来が良いからとか、そんなのではないというふうに私は今、思っているんですよ。

昔はそんなことは思わなかったでしょう、多分ね。けれども、今の私の気持ちとしては、我々はどれもこれも五十歩百歩なんです、神さまの目から見たら。日本では、「エベレストが高い、どの山がどうだ」と確かにありますよ。でも、遙か宇宙の向こうから地球を見たら、そんなに高い低いもないのではないでしょうかというような気持ちなんです。

要するに、私が申し上げたいのは、本当に私たち一人ひとりが神・キリストからどれだけの深いご恩を受けとっているか。その受けとり方によって、私たちのそれからのちの生き方が変わってくるということなんです。「出来が良いから悪いから」とか、そんなのではない。相対的にはそういうこともあるかも知れませんよ。けれども、本質的には人間というのはみんな本来、エゴイストで自分のことしか考えていなくて、自分を大事にしてくれる者は大事にするし、自分を粗末にする者は蹴飛ばすよということです。

●自己保存本能のエゴ

そういう、当然のことながら打算的なのが、生物体としてはしょうがないんですよ。自己保存する以外、誰も守ってくれない。そしたら、自分で自分を守るしかしょうがない。別な言葉でいえば、自分を大事にしてくれる者は大事にする。そうでない者には見向きもしないという、これが非常にごく自然なことなんです。そういう自然的な人間の在り方、これが実はエゴということです。それで、

「エゴが罪だ」

というふうに小池先生が仰った。ということは、人間というのは自己保存本能がある限り、生物体としての人間はエゴイストたらざるを得ない。そうでないと生きて行けない。そういうことなんですね。

そういう人間の「出来の良し悪し」なんかではなくて、我々は、小池先生から言わせたら、

「人間の存在そのものが神に逆らっている」

という。「罪」というのは、私が少なくもアメリカの宣教師とかそういった方から聞いたのは、

「ああいうことをやった、こういうことをやった」とかいう、人間のやったことそのことについて「罪を犯した、何をした」という。ところが、小池先生の捉(とら)えておられたのは、

「人間存在そのものが神に逆らっている」

という。では、キリストの在り方は何かというと、「主の祈り」にありますように、

「主よ、聖名が崇(あが)められますように」

と。つまり、聖名一切、神さま一切なんです。ご自分はゼロなんです。キリスト・イエスという方はご自分はゼロで、神さまがすべてである。空っぽだからそこに神さまが百％お宿りになった。だから、

「私を見た者は父を見たのである」

と仰った。ところが、人間というのはやはり自我というものが邪魔して、そんなふうになれない。そういう自我という罪をキリストはご自分の十字架で贖ってくださった。そして、私たちを本当の神の子に相応しい存在に創り変えてくださった。それが十字架の恵みです。

「われ主と共に十字架に付けられたり。もはや旧きエゴなるわれ生くるあらず。復活のキリスト、御霊のキリストが新しく賜ったわが内にあって生き給うなり」

というパウロのガラテヤ書2章20節の告白となって表れてくる。そのようにして十字架で我々の旧い性(さが)、エゴというものが完全に葬り去られた。キリストが引き取ってくださった。そうすると今度は、それに代えて、キリストは我々に新しい「われ」というのをくださった。それが

「われ主と共に十字架に付けられたり。もはやわれ生くるあらず。新しく生命を賜ったわれが御霊に導かれ、キリストと共に生くるなり」

といった、ああいうガラテヤ書2章20節の告白になってくる。そこからはもう十字架というもので我々の根底、エゴが片付けられている。そういう旧き我はなくなって、そこに新しい生命を、新しい我を下さった。その新しい我を御霊が導いて、聖国への旅をなさせてくださる。

「もはやわれ生くるあらず。復活のキリスト、御霊のキリストわが内にありて生き給うなり」

というあのパウロのガラテヤ書2章20節の告白がナチュラルなものとして――エゴイスチックな価値観では自分からは出てこなかった――そういう在り方が、神中心・キリスト中心、そういった新しい在り方を主は十字架にかかって、我々のそういった自我、罪、背きを引き取って、そして、あのご復活の生命を我々に分かち与えて、神の国の民として我々を導いてくださる。それがキリストに生命をいただいて、キリストに導かれて生きて行くという、第二の我々の生き方です。これはもう恵みとしていただいている。これを私は、報恩の生涯と言いたいんです。世間的に言えば、

「このご恩は一生忘れません。このご恩はどんなにお返ししたくても、お返しできないくらいでかいです」

という、そういうクリスチャンが、一人ひとりが神・キリストからどれだけ大きなものを受けとっているか。その受けとり方の大小によって、その方のご恩返しもまた変わってくる。私はそういう気持ちでおります。

そんなものは若いときはわからなかった。本当のところね。けれども、この歳になりますと、本当にそういうことがひしひしと感じることができます。それが、

「われ主と共に十字架に付けられたり。もはや旧きわれ生くるあらず。復活のキリスト、御霊のキリストわが内にありて生き給うなり」

と、そういう生き方になって表れてくると思うんですね。

●京都キリスト召団の使命と各人の課題

そういうことで、今日のお話の要点は、第一番目は、イエス・キリストのお誕生それ自体が、そんな世間で

「やぁクリスマスだ、キリストが生まれた、うれしい、うれしい」

なんて言っているのではなくて、そもそも「十字架を負って生まれ給うた」という厳粛なる事実にまず目をとめてほしいということ。イエスはそれをそのまま受けとって、そういうご生涯を貫かれた。神に献げ切った生涯を貫かれた。キリストの生涯というのは、神に仕え人を愛すること、己を神と人に献げ切って生きてくださったご生涯であったという、それが一つですね。そのことを

「十字架を負って生まれ給うた主キリスト」

と言いたい。

そして、我々はそういうキリストからどれだけの深いご恩を受けとっているか。その受けとり方に応じて、我々の生涯の中味が変わってくる。言い換えれば、我々の生涯というのはご恩返しの生涯である。そういうことですね。そのことをこのクリスマスにはっきりと自覚しておきたい。

こういう視点から、京都キリスト召団の使命、役割、存在理由と、それから各人が賜っている課題を考えてみたいと思う。もう時間もございませんので、要点だけ申しますと、私たちの在り方は、「十字架と聖霊」ですね。いつも申しております。十字架で、

「われ主と共に十字架に付けられたり。もはや旧きわれ、エゴなるわれ生くるあらず。御霊のキリストが新しく賜ったわが内にありて生き給うなり」

それを一言で言いますと、十字架を土台にして聖霊に導かれて生きて行く、そういう生き方。そこに神・キリストの御意が成就していきますようにと。

「御意の天において成っているごとく、地にもこの身を通して成らしめてくだ

さい」

と。かつての自分は、「自分のこと、自分の幸せ」のために神・キリストを利用する、そんな自己中心の在り方であったのが、

「**われ主と共に十字架に付けられたり。もはやそういうエゴなるわれ生くるにあらず。新しき生命を賜ったこの新しきわれ、御霊が内住し、御霊が導いて御意をこの地に成就せしめ給う**」

と。そういうふうにして、己を神・キリストに献げ切って、

「**御意が天において成っているごとく、この身を通してこの地にもどうぞ御意が成りますように**」

ということ。「自分がどうのこうの」ではなくて、

「御意が成りますように。あなたが私において、私に関して抱いていらっしゃる御意、使命、それをどうぞ私によく悟らせて、そして忠実で在らせてください」

というふうに自分を献げて生きぬくといった――今までのエゴなる自分ではなくて――神・キリストの中心の新しい生き方、これが私は天国人としての生き方だと思います。それが天地を貫いて、私たちを本当の神の民、天国人として私たちを御意に適(かな)う生き方をさせてくれる、そういう事態だと思っています。

ですから、なにもクリスマスだからといって、特別なお話をしているわけではありません。けれども、せめてクリスマス、イエス・キリストのお誕生に思いをはせる、そういう機会にもう一度改めて、自分たちは神・キリストから如何なる恵みを受けているのか、如何なるご恩を受けているのか、そのことに思いをいたし、今度は自分たちの生涯というものは本当にご恩返しの生涯であると。「あれしてくれ、これしてくれ」なんていう、おねだりの生涯ではなくて、何とかして、

「主よ、あなたから賜った限りなきご恩に対して、如何に自分が応えることができるか。応えるのも導きがなければできません。御霊が助けてくださらなければできません。どうぞ、ご恩返しの生涯を貫かせてください。あなたの御意がこの身において成って行くように、どうぞ、御霊によってお導きください」

と。そういうふうな角度からの生き方に変わってこざるを得ない。「それが幸せか、幸せでないか」、そんなことは問題ではないんですね。

最後に讃美歌を一つあげておきたい。「主にのみ十字架を負わせまつり」（331番）を皆さんとご一緒に讃美しましょう。

1．主にのみ十字架を　負わせまつり、
　われ知らずがおに　あるべきかは。
2．十字架を負いにし　聖徒たちの
　み国によろこぶ　さちやいかに。

3. わが身もいさみて　十字架を負い、
死にいたるまでも　仕えまつらん。
4. この世の禍幸（まがさち）　いかにもあれ、
さかえのかむりは　十字架にあり。

●祈り

ひとことお祈りいたします。

主さま、ご臨在くださってありがとうございます。また、全国各地から主にある兄弟姉妹方をここにお招きくださいまして、ありがとうございます。こうして一堂に会して本当に聖名を讃え、聖名に感謝し、主を讃美することができます幸いを心からありがたく御礼申上げます。どうぞ、短い時間でございましたが、この僕の語りましたこと、それを皆さまがしっかりと受けとって、これからのそれぞれの歩き方、生き方、生涯をあなたに献げ切った主の栄光の表れのご生涯となりますように、お一人お一人をお導きください。

また、あなたがお建てくださったこの京都キリスト召団を、主よ、どうぞ末永くあなたがこれを顧みて、ここに御霊の主がご臨在くださり、ここに集う者が常に主にありて生き生きと主の僕・婢女として、聖名のために働くことができるように、御導きくださいますように、希（こいねが）いたてまつります。

今日ここに集おうとして集えなかった兄弟姉妹のこと、また病を得ておられる方々のことをどうぞ御顧みくださいますように。

この尽くしませぬ感謝と讃美、祈りを主キリストの聖名を通し、また皆さまの祈りと共に御前にお献げいたします。アーメン。